

第15期 第2回小平市緑化推進委員会 会議要旨

- 開催日時 平成28年11月16日(水) 午後6時30分～午後8時30分
- 開催場所 小平市役所 6階 601会議室
- 出席者 椎名委員長、山田副委員長、森田委員、市川委員、信山委員、田中委員
白井委員、加藤委員、菊地委員、小林委員、棚井委員、千葉委員、西成委員
(順不同)
- 傍聴人 なし
- 議題 (1) 第15期小平市緑化推進委員会の検討課題について
(2) その他
- 配付資料 (1) 小平市の人口動態の特徴について
(2) 市報 観光まちづくり振興プラン特集号
(3) 市報 観光まちづくり協会特集号

会議の要旨

委員長

まず事務局より、資料の確認及び説明をお願いします。

事務局より、資料の確認と説明があった。

説明後、次のとおり質疑や要望等があった。

委員

小平市の人口は今後20万人に達すると思う。また、その規模を維持するべきだと思ふ。そのためには、玉川上水などを利用した観光施策が必要である。

委員長

資料の人口予測はいつの国勢調査をもとに作成したものか。

事務局

平成22年のものである。平成27年の国勢調査をもとにした人口予測はまだ出ていない。

委員長

時期としては、今は人口予測と実際のかい離が一番大きい時期だと考えられるので、平成27年の調査をもとにした予測では減少が緩やかになっている可能性もあるだろう。

委員

上宿地区でも大きな開発があり、学校では教室が足りないという状況になっている。他の学区域でもそうした大きな開発が予定されており、そうした影響がこの予測には反映されていないのではないかと。

委員

今後高齢者が増えていくことは間違いないので、世田谷区で行われている、高齢者用遊具の設置やインストラクターの配置などの取組を検討してもいいのではないかと。

委員

資料の年齢階級別純移動率について、10代から20代前半での流入人口の増加と20代後半での流出人口の増加はどのように解釈すればよいか。

事務局

高校や大学への進学に伴い地方から上京してくる人、また就職等に伴い地方へ戻る人が多いことが一つの要因として考えられる。

委員

花小金井地域でも大きな開発がある。小平は山や坂がないので老人には住みやすく、若者にとっても通勤の便は悪くない。また、適度に農地が残っている現状もあるので、これがなくなるまで増えるのではないかと。そうした小平特有の要件も勘案しないと人口の予測は難しいだろう。

委員長

人口推計を打ち破るような魅力を作る施策を考えなくてはいけないだろう。

委員

大学等の数や収容人数が増えない限りはこれ以上の流入超過は見込めないのではないかと。

田園都市線沿線は山坂が多く高齢者の流出が多くなっている。そのため、駅の近くにマンションを建ててそこに引っ越してもらうような対策を行っているということだ。その点で小平市は住みやすく利便性が高いので、そうした点をうまく活用してい

くことが重要だろう。

航空写真で見ると小平は決して緑が多くはない。こうした部分もしっかり認識しなければならないだろう。

委員

年齢階級別純移動率を見ると30歳前で小平市から出ていく人が多い。この中には、結婚して出ていくという人も多いただろう。なので、自然や緑など、結婚後や子育てにも小平が良いのだというところをアピールする必要があるだろう。

人を呼ぶにはオンリーワンの価値が必要であり、小平で言えば小平霊園の美しい緑などがある。立川にはふじ幼稚園という世界に誇れる美しい建築がある。それによる人口増は少ないかもしれないが、施設に頼るというのも一つの手段かもしれない。

委員

子どもの遊び場というのも重要になると思うが、公園の数を増やすであるとか、そういう計画はあるか。

事務局

現在、市内に310か所の公園があり、毎年7、8か所程度増えている。しかし、これらは大規模な宅地開発の際に設置が義務付けられている公園であり、市独自で作るのは難しい状況である。そのため、年に何か所作るといった計画は立てていない。

委員

これ以上緑を減らさないようにするためには、相続の時に土地が分割されてしまうのをどうかしなくてはいけないと感じる。税制や借上げの制度などで対策はないか。

事務局

生産緑地の場合、まずは市に買い取りの申し出があるが、市としても財政的になかなか買うことが出来ない。農地は納税猶予の制度があるが、それ以外の資産には税がかかってしまうので、その支払いのために農地が売られるということがある。

委員

納税猶予を受けるためには農業を続けなくてはならないが、後継者問題があり続けることが出来ないために、別の用途への転換が起こる。

委員長

住みたくなる街小平というものを考えたときに緑がどういう役割をすべきか、とい

うことが重要。やがて生産緑地はなくなっていくだろう。それがなくなった後でも小平市が緑を守っていくためにはどうしたらよいかということを考えなくてはならない。

委員

小平市の面積に対する緑地の面積というのは、現在どの程度か。

事務局

小平市の面積が20.51K㎡で、緑被率が平成24年時点で31%という状況である。平成18年時点だと34%なので、6年で3%程度減少している。

委員長

他市と比べてどうか、という視点も必要になる。小平市を商品として見て、それを買ってもらえるか、というところが観光の視点だろう。

「プチ田舎」というのはどういう概念か。

事務局

都会に30分で出られるにもかかわらず、緑が多く、ゆったり過ごせるという小平のイメージを「プチ田舎」という言葉に込めている。

委員長

この言葉は埼玉や神奈川などの緑が豊富なところの人ではなく、小平と比較して緑の少ない都心の人を意識したものになっているので、都会に住んでいる人にどうアピールするかということだろう。

委員

小平は丸ポストのまちというが、田舎に行くとそうしたポストが残っているところもよく見る。玉川上水にしても、隣の東久留米や清瀬にも自然の川が残っており、小平市民として、自信を持てる資源を見つけるなり、磨き上げる必要があるように感じる。

委員

来た人が何を心得て帰れるかという実利的な部分を考える必要があるだろう。

委員

「玉川上水サミット」というものが3年程前に行われ、その中で管理を東京都から流域の市へ移すというような話もあったが、その後の進捗はどうか。

事務局

管理を移すというのは現実的に難しい部分が多い。

委員

グリーンロードが喜平橋と桜橋で分断されており、案内人でもない限りそこで止まってしまう人が多く、ここを何とか改善したい。また、現在JAの喜平支店跡が残っているが、ここをうまく整備してほしい。

委員長

観光まちづくり振興プランで言っている「観光」というのは、一般的に言う観光とは少し違う概念になるのか。

事務局

いわゆる観光というと、大型バスで来て買い物なりをして帰っていくというものが一般的だが、もともと小平市には大きな観光地というものがない。

これまでそうした大きな観光地のない小平に、そういった観光地を作ったとしても、観光地に局地的に人が集まっても、地域全体の活性化にはつながらないだろうという考えがあった。そこで、地域が元気になるような、まちづくりにシフトしていけないだろうかという視点からこのプランを策定した。

委員

観光まちづくり協会に加入しているが、そこではまだ活動の方向性の議論について結論は出ていない。

事務局

グリーンロードを歩かれる方はたくさんいるが、電車で隣接する駅まで来て、グリーンロードを歩き、電車で帰っていくという方が多い。そうした方々に市の中まで入ってきてもらい、飲食や買い物をしてもらおうような仕組みを検討している。

委員長

計画の策定にあたり、グリーンロードを歩く人がどういうところからきて、どういう風に歩いているかというような調査は行ったか。

事務局

振興プランを策定する際に、グリーンロードを歩いている方にアンケート調査及び交通量調査を行った。その結果、歩いている方は市内の方ももちろん多いが、隣接する市の方も多いことが分かった。

委員

グリーンロードを歩く人が何を求めているのかということが分かれば、緑化推進委員会として、具体的な提言が出来るのではないか。

委員長

具体性のある提言というのは重要だろう。抽象的な理念については、これまで提言を重ねる中で概ね出尽くしたところがある。

これまでの説明を聞いた限りでは「訪れたい」というより、小平を住むところとして選びたい、住み続けたい、というところに重点があるのだろう。

委員

今後、開発が入っていくというのは避けて通れないところだが、そこに戸建てが建つのか、それとも高層のマンションが建つのかということでも緑化の仕方は変わってくる。

また、市でも進めているところであるが、特別緑地保全地区を増やしていくことが緑の保全につながっていくだろう。稼働率の低い小さい公園を調査して、それらを統合するという事も検討しなくてはいけない。

委員長

確かに増やしていくことは必要になるが、財源の問題はある。公園を統合して特別緑地保全地区にするという要件は研究する必要があるだろう。

以上